『遊焉社常談』の構成

——江戸中期唐話資料の研究——

奥村佳代子

Yuensha Jodan in the Relationship to Other Documents from the Towa Period

OKUMURA Kayoko

Yuensha Jodan is a Chinese text book edited by Kingoku Ishikawa, although there is no information about the date. *Yuensha Jodan* was one of the Towa collections studied in Japan in the Edo era.

This paper analyzes the configuration of *Yuensha Jodan*. The influence or succession between *Yuensha Jodan*, *Toin Sanjiwa* and *Naolinao* will be pointed out through a comparison with *Toin Sanjiwa* and *Naolinao*, two of the manuscript copy of towa documents. On the basis of my discussion, I would like to argue the possibility that *Yuensha Jodan* shows an important part of the process of Towa learning in the Edo era.

キーワード：Chinese learning　three-character words
Edo era　Towa　*Yuensha Jodan*

1.「三字話」について

「二字話」、「三字話」のように、文字数によって「～字話」と称する分類は、唐話資料に見られる。たとえば、岡嶋冠山の『唐話纂要』(1718) や『唐語（唐話）便用』(1735) 等は、長崎で唐話を学んだ経験と知識を生かして纏めた一種の唐話学習書であると考えられるが、「二字話」に始まり「三字話」「四字話」「五字話」「六字話」のように、文字数によって語句を分類し、段階的に配置されている。また、武藤 (1926) が「唐通事は最初發音を学ぶ為に『三字経』『大学』『論語』『孟子』『詩経』等を唐音で読み、次に語學の初歩即ち恭喜、多謝、請坐などの短き二字を習ひ、好得緊、不曉得、吃茶去などの三字話を諳んじて更に四字以上の長短話を学ぶ[1)]」と紹介したように、少ない文字数の語句から文字数制限のない長短話へと段階的に学ぶ方法は、長崎においては唐話学習法として定着していたのだろう。

1) 武藤長平『西南文運史論』(岡書院、1926年)、51頁。

三字の語（三字話と呼ぶ）を中心に構成された資料に『唐韻三字話』がある[2)]。『唐韻三字話』と『南山俗語考』の三字の語には一致するものが多く収められており、これはどちらかが参考にして編纂されたか、両方が参考にした別の資料があった可能性を示しているといえ、唐話を学ぶ日本人の間に共通の知識となる「三字話群」があったのではないかと考えられる[3)]。

そこで本論は、共通知識としての「三字話群」があったとすれば、どのように伝播されたかを知るための、個別の資料の三字話を調査する基礎作業のひとつとして、『遊焉社常談』を取り上げ、どのように構成されているのかを検討することを目的とする。なお、本論で用いるテキストは、『唐話辞書類集』第17集（汲古書院刊、1974年）所収の『遊焉社常談』である。

2．石川金谷と「遊焉社」[4)]

『遊焉社常談』の第一頁には「遊焉社常談巻之上」「金谷石川貞太一　輯」と記されている。石崎1940によると、著者石川金谷は、名を貞、字を太一、号を金谷といい、先祖は河内の人であったが石川金谷自身は伊勢出身で、生没年は、石崎1940は不詳であるとするが、長澤1974は1778年（安永７年）に42才で没したとする[5)]。江戸時代中期の漢学者南宮大湫（1788年没）に学んだ後、大津での教授経験を経て大炊御門家に仕え、1773年（安永２年）に延岡城主内藤政陽に招聘された。著書に『唐音孝経』があり、延岡藩においては『詩語砕金』を編纂した。『唐音孝経』は1764年（明和元年）に刊行された書物であり、それに寄せた南宮大湫の序によると、石川金谷は単身で長崎に遊学し唐話を学び清人と交遊した経験の持ち主であるとのことである。石崎1940は、「遊焉社」とは「金谷等唐話学者の集まりであろう」としており、石川金谷らが唐話を学ぶ場であったと考えられるだろう。

『遊焉社常談』の出版年や出版元は、『唐話辞書類集』所収の本には記されておらず長澤1974も不明であるとするが、石崎1940によると新村出所蔵本には「明和七年京林権兵衛刊」と記されていたという。1764年刊の『唐音孝経』の序ですでに石川金谷の長崎遊学が紹介されていることから、『遊焉社常談』は長崎での唐話学習の成果をもとに編集されたものであると考えられるだろう。

『遊焉社常談』は、石崎1940では「「唐話纂要」もどきの語学書」、「冠山の語学書類と変わる所はない」と評されたが、本論ではその内容をその他の唐話資料との関連という観点から、改めて見ていきたい。

---

2) 関西大学総合図書館長澤文庫所蔵。写した人物や年代が記されていない写本資料である。二字の語（二字話と呼ぶ）と四字の語（四字話と呼ぶ）が一部に含まれている。概要は以下のとおりである。ページ数：本文171頁。収録数：１頁あたり約24「話」。発音表記：ほとんどに片仮名による発音表記が付されている。訳・語釈：訳や語釈が付されているものも多いが、誤りも見られる。題辞、序文、跋文、蔵書印、日付等はなし。

3) 『唐韻三字話』と『南山俗語考』の関連については、拙稿「唐話資料史における『唐韻三字話』――『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較――」（『東西学術研究所紀要』第47輯、関西大学東西学術研究所、2014年４月）。

4) この節の記述は、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（清水弘文堂、1940,）、167～168頁に拠る。

5) 『唐話辞書類集』第17集（汲古書院、1974年）の長澤規矩也氏の解題による。

3．『遊焉社常談』巻之上「三字話」

『遊焉社常談』巻上には「二字話」689語に続き、「三字話」995語が収められている。「三字話」995語のうち、『唐韻三字話』にも収められている語は、以下の831語である。

恭喜你	好得緊	不曉得	不會做	不會講	不會説	讀〻書	寫〻字	不打緊
不妨得	一樣的	不要頑	不要抄	怎麽樣	慢〻走	差不多	沒奈何	做不得
用心讀	多得緊	好東西	拿茶來	拿湯來	担酒來	拿出來	拿進去	好光景
有事幹	沒事幹	當心学	講甚麽	好天氣	妙得緊	説得好	請茶去	用茶去
吃茶去	没相干	辛苦你	有勞你	好大熱	好大雨	好大風	好大雪	好大冷
大得緊	小得緊	火燒了	請先生	為甚麽	獃東西	極好的	請菓子	客人來
同你走	請便罷	甜東西	會吃酒	明日來	請説〻	請先行	他做甚	你做甚
學過的	日本人	唐山人	紅毛人	朝鮮人	京上人	江戸人	日本話	唐山話
請他來	晒一晒	放出去	不在行	在行的	老在行	不明白	講明白	明白了
體面好	没體面	吹一吹	太多了	忒少了	在家麽	在家裡	不在家	問〻看
小〻的	大〻的	粗〻的	細〻的	寬〻的	陋〻的	扁〻的	解開來	正好吃
正好去	正好穿	一兩個	兩三個	十來個	一個月	兩個月	半個月	幾個月
頭一番	第二番	不見人	不要打	中〻兒	請上坐	洗〻手	打開來	倒出來
好月亮	明年来	夜裡来	一兩頭	十兩頭	吃早飯	吃中飯	吃午飯	吃晚飯
吃夜飯	會吃飯	多得狠	漫大的	活扯淡	活苦怪	活作怪	活造化	活騙人
沒有茶	沒有火	茶也有	奉杯茶	請上來	等一等	有鑰匙	鎖好了	紙上寫
那個人	這個人	冷得緊	熱得緊	凉得緊	暖得緊	乘〻凉	點得來	點不來
送把你	把我看	把人看	他説道	要打哩	不消改	不必改	滿〻的	不滿的
洗〻浴	淨〻浴	會打鼓	會騎馬	好吃烟	好吃茶	好京酒	燙一燙	拿來吃
放紙鳶	放鷂子	吃乳麽	不吃乳	我知道	笨東西	多年的	年尊的	年高的
年幼的	年輕的	活強盗	頭一號	第二號	要緊話	開〻口	開〻眼	動〻手
好吃素	好吃葷	等着用	就要用	也不要	讀得麽	讀不得	打抽豐	回味好
不見你	請教我	不大好	那里人	別處人	甚麽人	可惡他	可恨他	他不要
我要的	小解去	抽解去	大解去	解手去	走過去	肚子疼	手上痛	頭裡疼
頭上痛	大性急	強東西	這一本	那兩本	這幾本	放底下	放上頭	外首坐
裡邊坐	有慢你	怠慢他	就是你	冷不過	粗大的	正經話	拜〻你	謝〻我
比〻看	惱死他	寫一半	噴出來	吃了驚	吃驚了	吃個驚	遊山去	遊海去
也是少	累了墨	累了泥	累了油	把木梳	掠一掠	討個火	打圖書	正月裡
拜年去	長〻的	短〻的	方〻的	圓〻的	有客人	上頭來	上頭去	討些來
後日來	請去看	請來看	只管讀	看戲去	是不是	肯不肯	曉得麽	曉得的
少些讀	不要多	背不出	明朝學	讀前頭	記得麽	記得的	不記的	忘記了

仔細聽	仔細看	説〃看	多呢少	得罪你	要多少	不要動	不要腦	有風來
沒有風	叫他來	叫你去	不耐煩	耐頑些	邀他來	厭得緊	不厭的	賣完了
賣得完	賣不完	做完了	做不完	做得完	完了麽	也有的	也沒有	賣把你
放他去	抹一抹	揩一揩	揩過了	筭差了	甚麽話	洗〃臉	洗〃脚	新開的
上好筆	晴得好	天晴了	天陰了	下雨唎	日子好	告別了	有精神	没精神
同來了	同去的	那里去	那里去	天亮了	好起來	讀〃看	有許趣	貴得緊
賤得緊	好大的	老人家	後生家	好扇子	他教你	你會得	通得來	通不來
看過的	不曾來	講過的	不曾講	經過手	打花押	改了姓	改了名	改了號
改了字	改姓煞	改〃詩	改文章	送禮物	不是他	不是人	萬全的	好熱的
好冷的	新〃的	舊〃的	扇一扇	未必阿	托我看	托你看	請坐〃	記心好
不送了	包起來	開了門	關了門	用過了	弄鬼的	穿衣服	托進來	托過去
訂一訂	免了我	免了他	日子長	好讀書	好田地	不必論	何苦得	走進去
騙一騙	他騙你	宿一宿	沖一沖	大家來	花開了	花謝了	信不得	是個大
愛讀書	走開去	不大用	希罕的	拜〃節	早些來	好朋友	本地人	送喪去
又獃哩	看不見	有限的	屋裡忙	好個花	要寫呢	不要寫	太平了	飛去了
一個字	一把刀	扇上了	扇了門	散生日	大生日	磨一磨	沒有菜	要去看
就去看	發了腦	狠的阿	兌〃看	秤〃看	禁了烟	梳〃頭	量〃看	敲鑼鼓
上了舩	嗽〃口	大罪過	多拜上	多致意	痛得凶	疼得狠	吃了去	不用麽
包一包	有刺的	沒有刺	蚊子叮	蚊虫叮	敲得碎	敲不碎	理一理	理好了
且回去	討回話	直氣的	話長哩	怕羅娑	扯破了	扯不破	扯一扯	我也讀
你也寫	好了些	不痒麽	別樣的	元舊的	借了來	借去了	在那里	長俊的
流水讀	費工夫	簇新的	鬪出來	討轉來	約定了	藏過了	苦腦子	苦得緊
没臉嘴	會寫的	會筭的	好臉皮	説不尽	要睡覺	熬一熬	打漿糊	核桃漿
秤銀子	肚子通	是個説	這等説	話不通	紙包兒	配了藥	去了麽	也不好
不大有	還未説	担過來	烏黑的	漆黑的	嗅〃看	古執的	被髮的	大貴的
爛賤的	忙急〃	倒好吃	倒好看	作中人	做保人	會做文	會做詩	拿究他
敲進去	敲〃看	看慣了	聽慣了	好美菜	閑空的	清空的	已來了	已去了
叫化子	滿肚皮	有記才	不來催	不去催	好困的	好睡的	大女兒	小女子
風流人	摽致的	齊整的	收了來	借把你	把箋兒	指〃字	劣懶病	臢物事
也是麽	是這裡	荷花池	研一研	望〃你	不出門	出門去	都有的	都沒有
縛一縛	不要慌	揭開來	揭得開	揭不開	篩出來	胖〃的	胖大的	胖了些
拆房子	好笑的	突出來	閃了腰	講錯了	捱一捱	摳得着	摳不着	厚些兒
薄些兒	見識好	見識高	用錢多	添一個	街上人	丟掉了	不丟掉	月白色
淡紅色	大紅色	鵝黄色	淡緑色	桃紅色	茄花色	水墨色	好顔色	調兵馬
好去打	使雙刀	上半年	下半日	生了子	有子的	淡泊些	打東道	垂落來
垂下去	狐狸炒	困不着	有良心	沒良心	好賭的	好嫖的	趕上來	趕得及

趕不及	換把你	新鮮的	開了刀	拔了刀	笑甚麼	尋甚麼	不敢當	添了些
併攏來	合攏來	拿攏來	叫攏來	王道藥	霸道藥	掛好了	他勸他	不信佛
信佛的	大前日	小頭兒	大頭惱	剔指爪	剪指甲	歇一歇	金打的	風頭地
不要困	放了火	日〻來	月初頭	夾〻笆	織成的	好煞野	汚穢的	有疙瘩
晒黑了	有神道	討老婆	上之上	下之中	晩間來	起房子	點蠟燭	搭落來
甚麼忙	抬石頭	抬木頭	家口單	呆木了	靜〻兒	烘〻手	一两様	一滴兒
一丟兒	一塊兒	一片兒	一枝兒	一件兒	一把兒	水火爐	火刀石	千里鏡
筆尖上	三絃子	大屏風	小屏風	八分書	尖頭筆	白毫筆	寸錦筆	走馬燈
飛白字	釣魚舩	烟柴頭	土藥材	芭蕉扇	牛皮膠	綉毬花[6]	山茶花	四季春
長春花	水仙花	鬻粟花[7]	牽牛花	木槿花	剪秋羅	瑞香花	金燈籠[8]	萬年青
覆盆子	玉簪花	郁李花	梧桐樹	胡蘿蔔[9]	白扁豆	白葡萄	紫葡萄	黄鼠郎
哆囉絨[10]	綢緞舗	生藥店	書坊店	雞蒙眼	獃和尚	風和尚	好漢子	慢驚風
大麻風	白癜風	五穀虫	細腰蜂	地扁蛇	螢火虫	牛皮糖	尊夫人	大臉孔
大鼻頭	壅鼻子	窊鼻子	不得已	照〻看	医道興	石首魚	老尼姑	鮮酒的
耳聯响	和尚腔							

『遊焉社常談』巻上では三字で収められているが、『唐韻三字話』では「的」を伴わず二字で収められているものは、次の11語である。

青色的	黄色的	赤色的	白色的	黒色的	紅色的	藍色的	緑色的	茶色的
醬色的	灰色的							

意味が同じではあるが、文字違いの語は次の４語である。左に『遊焉社常談』巻上の語を、右に『唐韻三字話』の語を（　）内に挙げる。

柳條緞（柳條布）　板不倒（搬不到）　優待我（優待他）　鬆〻兒（鬆々地）

『遊焉社常談』巻上「三字話」にあり、『唐韻三字話』に収められていないものは次の256語である。

做得好	裝火來	留心寫	請郎中	琉球人[11]	大阪人	晒乾了	有酒麽	請上去

6)『唐韻三字話』は「繡球花」である。
7)『唐韻三字話』は「嬰粟花」である。
8)『唐韻三字話』は「金灯籠」である。
9)『唐韻三字話』は「胡蘿卜」である。
10)『唐韻三字話』は「多羅絨」である。
11)『唐韻三字話』は「瑠球話」である。

不消説	囉唣的	不囉唣	只管學	只管做	好長鬚	没鬚的	耳聾的	眼瞎了
糖好吃	這般説	打號子	做人好	覆轉來	翻轉來	省事些	省力些	把剪刀
剪一剪	也好大	獃娃子	懶物事	懶東西	也不是	也不曾	正是你	正是他
小心好	一向病	病好了	甩掉了	請改〃	請看〃	請聽〃	請談〃	饒恕我
想一想	想出來	背得來	揩抹麽	筭一筭	筭得准	暫別了	沒有趣	把扇子
禁了酒	在這里	紙包的	歇兩天	失火了	一張兒	手把照	水墨畫	近視鏡
不求人	火烙印	吹火筒	炊飯甑	石運轉	磨刀石	黄二娘	怕痒花	蝴蝶花
紫羅蘭	紫燕花	蜀葵花	海棠花	石榴花	杜鵑花	映山紅	滿山紅	山丹花
雞冠花	鳳仙花	忘憂草	剪春花	雁來紅	老少年	辛夷花	十姊妹	敗醬花
虞美人	梔子花	刀背草	蓬萍草	草烏頭	八角刺	蒲公英	南天竹	霸王樹
鳳尾蕉	美人蕉	銕梨木	花梨木	無花樹	合歡樹	章郎花	車前草	木賊草
懸鈎子	柳條穿	五針松	七絶樹	胡蘿蔔	裙帶菜	石花菜	紅花菜	海鹿菜
雪花菜	七絶樹	裙帶菜	石花菜	紅花菜	海鹿菜	雪花菜	天花菰	横魚公
魚虎狗	繡眼兒	告天子	白頭公	烏骨雞	黄山魚	回腮魚	海鷂魚	鍋蓋魚
過臘魚	白皮紙	狗母魚	青鰶魚	金絲魚	方頭魚	大口魚	老婆魚	華臍魚
龍頭魚	鬼拳頭	江瑤柱	親家公	麵條魚	大花紬	小花紬	二重紬	牛良紬
紅縐紗	花縐紗	椒花緞	八絲緞	界地緞	烏大緞	大花緞	素服緞	天鵝絨
單福絨	芭蕉布	眼包皮	大母指	脚膝碗	近視眼	酒糟鼻	田螺眼	鷹嘴鼻
井灶鼻	雙生子	瓜子金	羊皮金	典當舖	螺鈿匠	鑄冶工	裱褙匠	兌換店
泥塑匠	磁器匠	魚獵戸	千里馬	劊子手	氣上升	皮寒病	絞腸痧	急驚風
白癩病	相思病	痤佛瘡	白禿瘡	痘風瘡	走馬疳	牛程躂	黄豆瘡	做針指
上臙脂	猜啞謎	紅蜻蜓	尺蠖虫	屠蘇酒	蜜林酒	米粉子	麥芽糖	令兄弟
令姊丈	令門人	敝門生	貴相知	孔聖人	孟夫子	小大官	好福相	唱曲子
唱歌兒	口字爿	戧人爿	無比的	打水來	好肴饌	甞〃看	亡過了	回首了
把鏡子	掛了蓬	雞鳴了	間壁人	捉老鼠	嚼碎了	埋怨他	蜘蛛網	記錄手
脱衣服	厚情人	薄情的	縛得鬆	礬過了	結了氷	吃稀飯	鮮毒的	夜深了
倦了些	疲了些	磨〃墨	飯糊兒	指教我	遊方僧	椒樹皮[12]	有柄把[13]	把索兒
縛好了	有毛病	鄉巴老	無忌諱					

『唐韻三字話』にはなく『遊焉社常談』巻上「三字話」にはある語には、動植物や魚類の名称、病名が特に多く含まれているといえる。『唐韻三字話』にないもののうち、以下の語は、『南山俗語考』の以下の項目に収められている。

12)『唐韻三字話』には「椶樹皮」「榆樹皮」がある。

13)『唐韻三字話』は「有把柄」である。

「疾病瘍瘡」急驚風　皮寒病　白禿瘡　黄豆瘡
「魚鼈蚌蛤」黄山魚　麵條魚　江瑤柱
「樹竹」五針松　銕梨木　花梨木
「花卉」石榴花　海棠花　滿山紅　南天竹　雞冠花　蜀葵花　鳳仙花　紫羅蘭　蓬萍草

上に列挙したように、『遊焉社常談』巻上「三字話」の多くが、『唐韻三字話』の語句と一致している。『遊焉社常談』巻上「三字話」にはあり、『唐韻三字話』にはないものもあり、またそれ以上に『遊焉社常談』巻上「三字話」にはなく、『唐韻三字話』にはある語句が多いとはいえ、『遊焉社常談』巻上「三字話」の８割が『唐韻三字話』にもあるということからは、両者の間に何らかの繋がりや影響関係を及ぼすものがあったと言えるだろう。また、『南山俗語考』に『唐韻三字話』は影響を及ぼしたと考えられるが、『南山俗語考』の編纂過程には、複数の書物や知識源があった可能性を、『遊焉社常談』「三字話」と『南山俗語考』の一致状況は示していると言えるだろう。

４．『遊焉社常談』巻之下「長短話」

「長短話」という呼称は、唐話資料で二字話三字話等の文字数単位での段階の後に長短さまざまの唐話が対話形式や会話の一部の体裁で羅列されるものに付されることが多い。

『遊焉社常談』の「長短話」は、各話題によって「○」の記号で区切りが示されており、145組に分けられている。内容は、初対面の会話、気候をめぐる会話、食事や娯楽に関する会話など、日常生活の中で交わされるものが多いが、学業、とりわけ唐話に関する会話が含まれていることを注目すべき点として次に挙げる。

(1)　我們舊年起學話。學到今年足足一年。也不覺得一個月。眞眞光陰如箭。
(2)　這個物件。唐山話怎麼講。正是。這個東西叫做竹夫人。東坡先生也叫青奴。
(3)　唐話是每日要講。若是歇了一天。舌頭硬起來。像個木頭一樣。動也動不得。那里説得轉。所以古人説得好。三日不講。口生荊棘。
(4)　你學得幾句話。切不可忘記要緊。多謝多謝。老兄好意見教的好話。從今以後。小弟再不敢懶惰。好好。你只管用心。後來學得成了。多少有趣。
(5)　昨日到先生家去赴席。講両句唐話。大家好不稱讚了。如今你學詩文麽。豈敢。小弟才短。那里能得賦詩做文。但是這両天。先生家裡赴席。不得已而杜撰両句塞責。
(6)　昨日學得話。因爲字眼太多了。眞正難講。不打緊不打緊。這個叫做先難後易。先學了難講的話。落後容易得狠。
(7)　後生可畏。今世人個個會做詩做文章。眞正伶俐。你們也再過兩年。不得不做。要是留心留心。多謝。小弟還年幼。不要説兩年。再加兩年。也那能勾做得詩文。小弟的情願。一兩年內。講両句唐話就勾了。勞動兄長。請教請教。你不要説這樣没志氣的話。要做皇帝。纔能得諸侯國王。要到聖賢的地位。纔到豪士高人的田地。後生家志向要大的。讀書講話。要是出類拔群。那時節纔做大

先生得過。用心用心。

(8) 你們講話。講得糊糊塗塗。竟不明白。我們聽不出。正是。小弟們還講不慣。故茲講的不三不四。仰伏請教請教。

(9) 唐話講熟了。一句當得十句。講不熟。十句當不得一句。頭裡講錯了。

(1)から(9)で述べられている内容からこれらは、唐話を学びさらには詩文を学ぶために先生のもとに集まった師弟間でのやりとりだと理解することができる。編纂者の石川金谷自ら長崎に遊学した経験があることから、唐話を巡る会話は「遊焉社」での会話を記録したものであると考えることができるだろう[14]。

「長短話」で用いられている代詞、疑問詞、語気助詞を、石崎1940が同類のものであるとした岡嶋冠山編『唐話纂要』の「長短話」との対比させてみる。

	『遊焉社常談』「長短話」	『唐話纂要』「長短話」
代　詞	我・我們・你・你們・他 這・此・是・這樣・這般 這里・那里・(那首) ケ麽	我・我們・我每[15]・你・儞・你們・他 這・此・之・是・那・此般・這般・直恁・恁地 這裡・此間・那裡・那首
疑問詞	那里・幾・多少・什麽・何・怎・怎麽・怎麽樣・如何・何如・豈	誰・什麽・何・怎・怎的・怎生・怎麽樣・怎恁地・如何・若何・豈・安・焉
語気助詞	阿・呢・了・也・麽・耳。矣	了・哩・則個・哉・也・矣・焉・耳・麽・否

個人の通常の会話において固定的あるいは限定的に用いられると考えられる代詞、疑問詞、語気助詞を取り上げ、『遊焉社常談』と『唐話纂要』とを比較した結果、会話ではあるが両者ともいわゆる文言と白話の語彙がともに用いられてはいる点が確認できたが、『唐話纂要』の方が用いられている語彙が、文言と白話ともにやや多い、つまり固定的（限定的）な側面が弱いということが分かった。岡嶋冠山の唐話資料の特徴のひとつは、語彙の使用が固定的、限定的でなく、多様であり均質ではないという点であるが、『遊焉社常談』にはその点を特徴とするほどには、多様であり均質的ではないとは言えないだろう。

14) 石川金谷等が唐話や詩文等を学んだ「遊焉社」は、おそらく『唐音孝経』刊行の1764年頃から延岡藩に仕える前の1772年頃までのある期間活動していたのだろう。『唐音孝経』が京都の書肆から刊行されていることや、「長短話」の次の会話内容から、京都で開催されていたのではないだろうか。

○今朝我到二條去。迎接先生。要山上去採藥草。一到寺街上去的時節。就下了一陣大雨。所以先生等在那里。看看天色。雖是天晴了。地下稀爛。不能上山。今日又歇了一天。失落了手中的寶貝一樣。

○兩天是四條橋梁乘凉的人多多。街上十分熱鬧。我們鎮日坐在樓上讀書。眞正不便。街上走過的人。説了有趣的話。我們聽得也高興。讀書講話總不在心上。天天閑過日子。寔在不便。不知貴街上清空的麽。正是。小弟家裡也一般。囉唣囉唣狠囉唣。

15)「我每」は「我-每」と印があり、「我」と「每」は個別の語であることが示されており、印がなく一語とみなされていた「我們」「你們」とは異なる認識を持っていたと考えられるが、ここでは代詞とした。

5．『遊焉社常談』巻之下「話説」

「話説」は、長崎唐通事の唐話資料である「閙裏閙」の一部と同じエピソードが収められている[16)]。「閙裏閙」と同様の内容が大部分を占めていることと、字句や表現の違いを示すために、以下に「話説」の全文を挙げ、「閙裏閙」の該当部分と対照する。

「話説」	「閙裏閙」
話説。原來人家日常裡做人家要緊。 用一厘一毫銀子。也要思前慮後。 不可亂用爲何呢。 若是撒漫財主。撥天撥地用掉了銀子。明日漸漸地。家私搖動起來。一下到了大窮的日子。手中乾燥。比別人更加受苦。往常在金銀堆裡滚大起來。使滑的手兒。 所以若是一刻没得銀用。便過不去。 就是借了些債。原是用過大錢的。 些少銀両。像個吃碗泡茶一般。霎時間就完了。 若是平常手裡捏得緊。 酸酸澁澁。省用慣了。那時節縱或做了窮鬼。也是平常了。不到十二分苦楚的田地。常言説道。有千年產。没千年主。那里一生一世。子子孫孫。富貴過日子。當初有錢。是個財主。人家自然趨奉你。今日沒錢。是個窮鬼。人人就不禮你。雖然如此。也有一説。天不生無禄之人。地不生無根之草。 難道就沒有再好的日子。 一下運氣轉頭的時節。自然仍舊做個財主。再筭不定人家。 那里限得他定。所以他那生成慳吝的人。省慣的家裡。緊溜的手兒。今日貧窮。沒有什麽十二分過不去。憑你怎麽様的苦也受得起。 甘願吃漫苦的苦茶。吃漫稀的稀飯。 本本分分守自己的分量過日子。再不想去做歹事了。這等的人。自然有日子掙起。當初一様的家私來。他那奢華的敗子。撒漫的性兒、撒撥的身子。放蕩慣了。到了貧窮。一些苦也打熬不來。想起當初的受用。只管想好魚好肉。想得口中淡出鳥來。肚裡飢出鳥來。花言巧語。滿口講諞人家的話兒。 東也去借一两銀子。西也去少一件東西。一日没得銀子。手裡痒不過。按納不住。只管煩惱了。 到了泯頂的田地。失面做賊人。 偷人家的物件。一下做了強盗。再没個起頭的日子。殺人放火。無所不至。造了許多的孽障。弄得後來死在刀鎗之下了。	話説原來人家日常裡做人家要緊。 用一厘一毫銀子。也要思前慮後。 不可亂用。手緊就是了。為何呢。 若是撒漫財主。撥天撥地用掉了銀子。明日漸々地。家私搖動起來。一下到了大窮的日子。手中乾燥。比別人更加受苦。往常在金銀堆裏滚大起來。使滑的手児。 所以若是一刻沒得銀子用。便過不去。就是借了些債。原是用過大銭的人。 些少艮兩。像ケ喫碗泡茶一般。霎時間就用完了。 若是平日手裡捏得緊。 酸々澁々。省用慣了。那時節縱或做了窮鬼。也是平常了。不倒十二分苦楚的田地。常言説道。有千年產。沒千年主。那里一生一世。子々孫々。富貴過日子。當初有銭。是ケ財主。人家自然趨奉你。今日沒銭。是ケ窮鬼。人人就不禮你。雖然如此。也有一説。天不生無禄之人。地不生無根之艸。 難道就沒有再好的日子不成。 一下運氣轉頭的時節。自然仍舊做ケ財主。這也再筭不定人家。 那里限得他定。所以他那生成慳吝的人。省慣的家裡。緊溜的手児。今日貧窮。沒有什麽十二分過不去。憑你怎麽様的苦也受得起。 甘願吃漫苦的茶児。吃漫稀得稀飯。 本々分々守自己的分量過日子。再不想去做歹事了。這等的人。自然有日子掙起。當初一様的家私來。他那奢華的敗子。撒漫的性児。撒潑的身子。放蕩慣了。到了貧窮。一些苦也打熬不來。想起當初的受用。只管想吃好魚好肉。想得口中淡出鳥來。肚裡飢出鳥來。花言巧語去。滿口講騙人家的話児。 東也去借一兩艮子。西也去打一件東西。一日沒得艮子用。手裡痒不過。按納不住、只管煩惱。 到了泯項的田地。失了體面做賊。 偷人家的物件。一下做了強盗。再沒ケ起頭的日子。殺人放火。無所不至。造了許多的孽障。弄得后來死在刀鎗之下了。

16)「閙裏閙」のテキストは、関西大学総合図書館長澤文庫所蔵の本を用いる。また、「閙裏閙」については、六角恒廣『中国語教本類集成』第１集（不二出版、1991年）所収書解題（５頁）と、奥村佳代子『関西大学図書館長澤文庫所蔵唐話課本五編』（関西大学東西学術研究所資料集刊30, 2011年）の解題（15～18頁）を参考にした。拙著の翻刻は漢字、句読の位置の両方において誤りが多いため、本論では可能なかぎり訂正した。

「話説」	「鬧裏鬧」
你説個起根發脚。是在那里呢。	你説這ケ起根發腳。是在那里呢。
不過是在不省用這三個字上來的了。	不過是在不省用這三ケ字上來的了。
古人説破慳吝的人。	唐山人説破慳吝的人。
取個綽號説道。	取几ケ綽号説道。
守錢虜。或者是説看財奴。又説吃狗屎的太御。多少咒罵了。又説一個道理好像和尚説法一般。	守錢虜。或者是説看財奴。又説吃豹屎的大御。多少咒罵了。又説一ケ道理好像ケ和尚説法一般。
一味亂話道。人生一世。草生一春。	一味亂話道。人生一世。草生一春。
你既有銀子。只圖快活下半世也好。	你既有了艮子。只圖快活下半世也好。
爲何這樣酸澀。有口也不吃好東西。有身子也不穿好衣裳。譬如一個米。一粒一粒數起來煑飯。一個柴火。一根一根秤起來燒。用得謹謹愼愼。	為何這樣酸澁、有口也不吃好東西。有身子也不穿好衣裳。譬如一ケ米。一粒々々數起來煑飯。一々柴火。一根々々称起來燒。用得謹々慎々。
蓄了多少銀子。	積蓄了多少艮子。
活到幾百歲。人生七十古來稀。就是活得一百歲。	活到几百歲。人生七十古來稀。就是活得乙百來歲。
必竟是一死。辛辛苦苦。積得銀子。明日一下死了。帳落得把別人受用了。你死的時節。這個銀子可將來。做得行李。帶到陰間去麽。今日人家見你手裡畧覺活動。貪圖借些銀子用用。假活兒陪個小心。只管來趨你。	必竟是一死。辛々苦々。積得艮子。明日一下便了帳落得把別人受用了。你死的時節。這ケ艮子可將來。做得行李。帶到陰間去麽。今日人家見你手裡畧覺活動。貪圖借些艮子用々。假活児陪ケ小心。只管來趨奉你。
一下你口眼閉了。那時節樹倒活猻散了。莫説沒人説你一個可憐。	一下你口眼閉了。那時節樹倒猴猻散了。莫説沒人來説你一ケ可憐。
就是受了大恩的人。	就是受了大恩的人。
也沒有替你墮淚。	也沒有來替你隨淚
你的妻子們。怎麽没投没奔。	你的妻子們。怎麽様沒投沒奔。
沒有生活。也不來救濟。若是有人説你的恩人死了。何不念一番。	沒有生活。也不來救濟、若是有人説你的恩人死了。何不念一番。
當初擡舉的你恩情。	當初抬舉你的恩情。
該替他做好事追薦他的亡靈。	替他做好事追薦他的亡靈。
不然墮些淚也見得情分了。那人見説這話。倒是冷笑了。滿口講鬼説道。	不然隨些淚也見得情分了。那人見説這話。倒是冷咲了。滿口講鬼話説道。
若要我下淚。我的眼睛。不是個洞庭湖。那里有許多眼淚出來。	若我隨淚。我的眼睛。不是ケ洞庭湖。那里有許多眼淚流出來。
你説好聽不好聽。目今世間。	你説好聽不好聽。目今的世上。
這樣人情刻薄。你偏生自己不會快活。每日把眉頭亂縐縐。省用銀子。打帳做什麽用頭。莫若依我的做法。得一日過一日。得一年過一年。今日有一两。就用一两。明日有二两。就用二两。買魚買肉。落得自己。	這樣人情刻薄。你偏生自己不會快活。每日把肩頭亂縐々。省用銀子。打張做什麽用頭。莫若依我的做法。得一日過一日。得一年過一年。今日有一兩。就用一兩。明日有二両。就用二兩。買魚買肉。落得自己受用。
尋花問柳。各處去吃酒頑耍。	尋花問柳。各處去吃酒頑耍。
快過下半世就是了。	快活過了日子。下半世就是了。
俗語説牡丹花底下死。做鬼也風流。為何不在花烘上頑耍。好不朦朧油嘴放屁。説得這樣嘴強。聽起來像個中聽。但是由我看來。寧爲雞口。莫爲牛後。	俗語説牡丹花底下死。做鬼也風流。為何不在花烘上頑耍。好不朦朧油嘴放屁。説得這樣嘴強。聽起來像ケ中聽。但是由我看起來。寧為雞口。莫為牛後。
寧可做酸澀的人。不要做敗子。	寧可做酸澁的人。不要做敗子。
破了家私。到了没設法的。明日做強盗。	明日破了家私。到了沒設法的時節。做強盗。
自己一個人壞了體面還罷了。連祖上的名聲。也惹得不好聽。都説某人是某家的兒子。某人是什麽人的孫子。父母不教訓。所以不學長俊。做個憊賴的人。弄到這個地步。倒説父母不好。可見家教要緊。閑説少説。這個強盗有幾等幾様的各色。	自己一ケ人壞了體面還罷了。連祖上的名聲。也惹得不好聽。都説某人是某家的児子。某人是什麽人的孫子。父母不教訓。所以不學長俊。做ケ憊懶之人。弄到這ケ地歩。倒説父母不好。可見家教要緊。閑話少説。這ケ強盗有幾等儿様的名色。
如今把我所記的賊人之類。説把你知道。譬如在海上做賊的。叫做海賊。在山上打劫了過往的行李包裹的。	如今把我所記的数落一難。説把你知道。譬如在海上做賊的。叫做海賊。在山上打劫了過往客人的行李包裹裡的。
叫做剪徑。一個人馬熱鬧的所在。擠來擠去。擠在人叢裡	叫做剪徑。一ケ人馬熱鬧的所在。擠來擠去。擠在人叢裡

「話説」	「鬧裏鬧」
頭。故意挨肩擦背。擠緊了。神不知鬼不覺。把剪刀剪斷了人家的荷包偷了去。這個叫做剪拂。 唐山有一種響馬強盜。 這個夥計們。 好不利害。生得力氣高大。武藝熟演。人家聽得響馬的這一聲。魂不附體。心裡突突地跳起來。通身亂抖。怕也怕得狠。所以看見人家膽勇過人。強頭強惱的。便説道。 他有響馬強資。 或年七八歲的小姓兒。 不聽父母的話。只管作怪會頑的。那父母嚇唬他説。響馬來了來了。 也有梁山泊那一夥的人。一樣合了許多夥計。在山下了寨。 劫掠官府的東西。這一夥人。還曉的義氣。沒有搶奪百姓人家的東西。 聽見某官府貪了銀子錢。凌虐百姓的。就去廝打。打破了衛。擄掠了錢糧。 説了替天行道。替百姓除了大害。 若是做官清正的好官府。 再不敢去驚動他。人家説的草寇。就是這個了。也有燒悶香的賊人。也有開酒店。酒壺裡下了蒙汗藥。灌醉了人的。 也有飛簷走壁會過牆的。 叫做白食鬼。 或者故意通姦了人家的老婆。拐帶了逃走到別處去。賣他下水做婊子的。但凡賣良爲娼的。定要做一個圈套。瞞了本婦。只説有親眷在這里。托他尋個房子居住纔好。領人來看看。中了意纔好騙他過門。收了身價。 悄悄地逃去。逃得都不見了。	頭。故意撫肩擦背。擠緊了。神不知鬼不覺。把剪刀剪断了人家的荷包偷了去。這做ケ叫做剪綹。 唐山有一種響馬強盜。 這一夥老賊種。 好不利害。生得力氣高大。武藝也熱鬧。人家聽得響馬的這一聲。魂不附體。心裡突々地跳起來。通身亂抖。怕也怕得狠。所以看見人家膽勇過人。強頭強惱的。便聽道。 他有響馬強資盜。 或者年紀七八歲的小娃子。 不聽父母的話。只管作怪會頑的。那父母唬嚇他説。響馬來了。 也有梁山泊那一夥的人。一樣合了許多夥計。在山上下了寨。 劫掠官府的東西。這一夥人。還曉得義氣。並沒有搶奪百姓人家的東西。 聽見某官府貪了銀子錢。凌虐百姓的。就去廝打。々破了衙門。擄掠了錢糧。説道替天行道。替百姓除了大害。 若是做官清正好官府。 再不敢去驚動他。人家説得草冠。就是 這ケ了。也有燒悶香的賊人。也有開酒店。酒壺裡下了蒙汗藥。灌醉人的。 也有飛簷走壁會過墻的。 也有的叫做白食鬼。 或有故意通姦了人家的老婆。拐帶了逃走到別處去。賣他下水做婊子的。但凡賣良為娼的。定要做一ケ圈套。瞞了本婦。只説有親眷在這裡。托他尋ケ房子居住纔好。領人來看看。中了意纔好騙他過門。收了身價。 悄々地逃走。逃得影都不見了。
又説後漢朝又一個。姓陳名寔表字仲弓的。那時年成不好。一夜有個小偷。潛人家裡。躲在梁上。仲弓看見了。故意做不曉得模樣。叫起子孫們。正色教訓説道。你們用心要緊。不可放蕩。不良的人。也不是性兒不好。書經上有的。習以性成。畢竟到了那地位。梁上君子就是了。偷兒聽得。好大吃個一驚。魂不附體。梁上下將來。啼啼哭哭。滿面下了淚説道。老爹把天大的恩情。饒恕小的一個性命。仲弓安慰道。我看過你的狀貌。不像個不好的人。因爲年荒。生意貧窮。自然到這個地步。説罷。把二匹絹。送了偷兒。放了去。自是以後。一縣都沒有盜賊。古人語言。一點不差。前頭説過的幾等盜賊。都是年幼的時節。不聽父母的教訓。去嫖去賭。又好食酒。所以做了這等的人。你們衆人。學個正經。先學孝經。論語。詩經。書經。這個四部書。都是聖賢的言語事體。前言往行。總在裡頭。是書生的先？務。這四部書讀完了。即是看過他書的時候。書上沒有攔路虎。看書容易。然後把周易。春秋。左氏傳。公羊傳。穀梁傳。周禮。儀禮。禮記。孟子。個個熟讀。前頭説的十三部書。叫做十三經。這幾等書通得來。可謂學業大成矣。那諸子歷史文集之類。隨手讀過。越讀越好。不要懶惰。留心苦學。學得成了。見識遠大。至老快活。小子勉哉。	＊この部分は、「鬧裏鬧」には該当するエピソードがない。 ＊「鬧裏鬧」では、続いて盜みと詐欺の話が展開する。

「閙裏閙」は(1)節約と始末の話、(2)盗みと詐欺の話、(3)火事と放火の話、という三つのエピソードから構成されているが、『遊焉社常談』巻下「話説」には、節約と始末の話が収められ、その後に続けて、後漢の陳仲弓の「梁上の君子」のエピソードを挙げ、聖賢の言葉を学び学業を成就させるようにという戒めが続いている。こちらの話も、長崎の通事の間で伝えられていたものであった可能性があるが、現時点で明らかになったことは、『遊焉社常談』には「閙裏閙」の一部が収められているということであり、石川金谷が長崎で得た知識が活用されていることを明示しているといえるだろう。

6．まとめ

本稿では、『遊焉社常談』の構成を紹介し、「三字話」を糸口に、他資料との関連について調査し検討した。

巻之上に収められた「三字話」の語句の8割は、『唐韻三字話』という長崎あるいは薩摩において収集された三字話を記述していると考えられる資料の語句と一致している。収録されている三字話が『唐韻三字話』と一致するものが多数含まれる資料としては、他にも『南山俗語考』があり、『唐韻三字話』との関連を指摘することができるが、『遊焉社常談』もまた、『唐韻三字話』との関連を指摘することが可能であり、長崎を中心に共通の知識としての三字話群が存在していたこと、また、個別の資料は独自に一から三字話を収集したとは限らず、知識源あるいはお手本とした資料がまとまった形で存在していたことを示す有力な資料のひとつであると言えるだろう。

江戸時代の唐話学を代表するものとしてみなされている岡嶋冠山の『唐話纂要』には、『唐韻三字話』と一致する三字話が含まれてはいるものの、その数は僅かに過ぎず、『南山俗語考』や『遊焉社常談』とは明らかに異なっていることから、両者は一線を画する資料だと考えられる。

また、「長短話」とは、その時々にその場その場で交わされた会話の記録という側面があり、参加者や編者の唐話を学ぶ目的や立場、あるいは時代を反映しているのではないだろうか。『遊焉社常談』の「長短話」は、用語の種類から唐通事資料の長短話により近いと思われるが、調査対象を広げ比較していく必要がある。

唐通事資料の「閙裏閙」が一部ではあるが収録されていることからも、『遊焉社常談』は長崎で話されていた唐話や唐話資料が石川金谷によって反映されている資料であることは確かであるが、『唐韻三字話』とは一致していない三字話及び本論では取り上げることの出来なかった「二字話」と「話説」の「閙裏閙」にはないエピソードの由来に関しては今後の課題としたい。